



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3672 号 2017.5.25 発行

<生きる支える 心あわせて>いーばしょ (上) 思い語れる安らぎの場



東京新聞 2017年5月24日
ミーティングで思いを語り合うメンバーたち=三重県桑名市の「いーばしょ」で

四月のある日の午後、三重県桑名市の市街地にある障害福祉サービス事業所「いーばしょ」で、定例のミーティングが始まった。

この日のテーマは「自分の将来」。「メンバー」とよばれる通所者の中で、進行役のマキさん（28）が口火を切った。

「私は、作家になりたいと思って勉強したけれど、病気がひどくなって、本を読むことも、文章を書くこともできなくなった。でも今になって、もう一回やってみようって気持ちになっています。みんなはどうですか」

十数人のメンバーが順に答えていく。「働きたい」「もっと工賃がもらえるA型の事業所に行きたい」「遠慮したり、壁をつくったりする自分を変えていきたい」「まだ働くことを考えられないけれど、サックスを買いたい」…。うつ病や統合失調症などで社会生活が難しくなった人たちが、リラックスした表情で病気や障害を感じさせない。

ミーティングの効果について、理事長の久野充敬（みちたか）さん（67）は「もともと高いコミュニケーション能力のある人たちなのに、病気のせいで、考えが頭の中でぐるぐる回って言葉にできないことも多い。自由に安心して話せる機会を増やすことが大切です。だから作業中の雑談もOK」と説明する。

個人にかかわる問題は、スタッフが答えを出さず、必ず本人を交えて話し合う。

マキさんは、ここに来て間もないころ、精神疾患を理解できなかった父との関係に悩み、久野さんに相談した。すると父、祖母ら家族を含めた話し合いの場を久野さんが設定してくれた。

「父に、今まで言えなかった感謝の思いを伝えられたし、父もいーばしょの良さを理解してくれた。そこから元気になりました」

いーばしょのもう一つの特徴は「お金も、規則もない」こと。年間事業費はわずか千二百万円。常勤は施設長の野田盛二さん（52）と女性スタッフの二人だけ。送迎車もない。メンバーは自分で体調を判断して、行くか休むかを決める。作業は午前中の二時間だけ。収入が少ないため、工賃は月額平均三千元と、県内の最低水準だ。二階建ての建物は延べ五十平方メートルで築五十年。一階の作業スペースは、二十人が限界の狭さだ。

「でも、居心地がいいんです」と男性メンバー（51）は話す。「前に通った事業所は、恋愛禁止、飲み会も禁止。スタッフは上から目線でした。ここは、信頼して任せてくれる」

安らぎの場を得て、元気になった人たちは、次の段階を目指す。設立から四年に、支援した四十二人のうち二十人が巣立ち、一般就労を実現できた人が三人、本格的な作業を求められるA型事業所で頑張る人も十一人いる。利用者の滞留が課題の福祉事業所の中で、

かなりの好成績だ。（編集委員・安藤明夫）

<いーばしょ> NPO法人よすがが、2013年4月に設立。心の病気や障害のある人を対象に、雇用契約を結ばずに就労の機会を与える「就労継続支援B型」（内職、自主製品作りなど）と、自分のペースで利用できる「日中一時支援」の事業をしている。

<生きる支える 心あわせて>いーばしょ（下） 素朴で温か 素人の挑戦



東京新聞 2017年5月25日
作業の手を休め、利用者と雑談する久野さん（右）、野田さん（中）＝三重県桑名市の「いーばしょ」で

当事者を主役に、ゆるやかな支援を志す三重県桑名市の障害福祉サービス事業所「いーばしょ」は昨年十月、自分たちの活動を記した本を出版した。タイトルは「シロウトですんません」（やどかり出版）。副題も「精神の疾病や障害を抱える人たちとの『どもならんなぁ〜』のくいーばしょ

>の三年間」と、「ゆるさ満開」だ。

そもそもスタッフに、福祉のプロはいない。理事長を務める久野充敬（みちたか）さん（67）は、東京のCM業界で働き、バブル期の狂乱も体験した。津市に移ってカメラマンの仕事をする中で地域福祉に関心を持ち、日本福祉大の通信教育を受けて、精神保健福祉士の資格を取ったのが六十歳の時。やがて、がんが見つかり、手術で胃の四分の三を切除した。その後も二度入院するなど、体調は思わしくなかったが、三年前に誘われてここへ来た。

「病気になったことで、メンバーさん（通所者）との付き合い方が分かった気がします。常に対等の立場でありたいし、こちらが学ぶことが多くてとても楽しいです」。かつては、学生運動で名をはせた日大全共闘の闘士。今は、弱者の抱える問題を調整したり、持っている力を引き出したりするソーシャルワークの世界に「社会正義って言葉は生きていたんだなと思います」と、穏やかに語る。

施設長の野田盛二さん（52）も、久野さんとほぼ同時期に、日本福祉大の通信教育で精神保健福祉士の資格を取った。それまでは、大阪の芸能事務所でタレントのマネジャーをしたり、名古屋の環境系の市民団体のスタッフも務めたりした。人間関係に悩んだ時期もあり「苦しんでいる人たちには、互いに心地よい関係が何より必要」と、資金不足のまま立ち上げたのが「いーばしょ」。事業所で使う軽乗用車やクーラーは、メンバーや地域の人から寄付してもらった。

「自分が利用者だったら行きたくないと思うようなルールは作りたくない」。作業中でも、疲れれば二階の休憩室で布団を敷いて寝ても構わない。遅刻、早退も自由。

ミーティングで将来の夢を語り合ったとき、野田さんが挙げたのは「里山と古民家を買って、老いも若きも、みんなが自由に集まって遊び、体験できる場にする」と。それが地域福祉の一つの理想だと考えている。

メンタルの問題は、単一の解決策はない。いーばしょに数日通っただけで来なくなる人、通い続けても一進一退の人もある。仕事の厳しいA型の事業所に移った後、「日中一時支援」のサービスを使って「いーばしょ」を息抜き場所に併用する人もいる。

京都市で精神科のクリニックを営み、全国でも珍しい在宅患者の訪問診療を手掛ける高木俊介さんは「精神障害者の就労移行支援などが制度化され、それ自体はいいことだが、一方で素朴で温かい交流が失われているような気がする。そんな中で、プロではなく素人であることを大切にしている『いーばしょ』は、社会の中の居場所として大切だと思う」と話す。（編集委員・安藤明夫）

沈みゆく光の向こうに 河瀬直美監督作品 弱視男性と女性が見る希望

東京新聞 2017年5月25日



本作はアップを多用している。「人物の心情が受け取りやすいよう意図的にそうしました」と話す河瀬直美監督

カンヌ国際映画祭など海外で高い評価を受ける河瀬直美監督（47）の新作「光」が二十七日、公開される。視力を失いゆく男性カメラマンと出会い、変わっていく女性の姿を、監督の故郷奈良を舞台に描く。本作は開催中の同映画祭コンペティション部門に選出されており、最終日の二十八日（現地時間）を前に、受賞の期待も高まっている。（鈴木学）

前作「あん」（二〇一五年）の完成後、登場人物の動作や情景をナレーションで伝える視覚障害者向け「音声ガイド」の原稿を読んだことが原点となった。監督は「自分以上に作品のことを考えてくれている。同志を得た気がした」と感じ、本作の脚本を書いた。

主人公の美佐子（水崎綾女（みさきあやめ））は音声ガイドの仕事をつきかき弱視のカメラマン雅哉（永瀬正敏）と出会う。無愛想な雅哉にいら立ちを覚えながら、彼が撮影した夕日の写真に感動し、その場所へ連れて行ってほしいと思うようになる…。

俳優には舞台となる場所に撮影前から実際に住んで配役のままに生活してもらうのが「河瀬流」。水崎には実際にガイド原稿も書いてもらった。うまく表現できずに流す涙は本物だ。

役になりきっているかが試されるシーンの一つが、劇中映画を流し、視覚障害者らが音声ガイドをチェックする「モニター会」。心に迫る生の言葉を引き出すためリハーサルはなし。プロの俳優以外に一般の視覚障害者も出演しているが、台本は渡さず、実際に思ったことを言ってもらった。俳優はアドリブを交えて応じたという。「ここが失敗すると、この作品はだめになってしまうので時間をかけました」と話す。

二人がキスする山の上や、雅哉の部屋に差し込む夕日など、光の描写にはこだわった。視力を完全に失う不安や孤独に苦しむ中で雅哉は新たな光を見つけ、家族の問題を抱え迷っていた美佐子にも光が見える。「光を失った人に見える“光”を表現したかった」という。劇中映画の「目の前から消えてしまうものほど美しい」「思いが尽きないんだ」といったせりふに、二人の心情を代弁させた。

「2つ目の窓」（一四年）で奄美大島を、「あん」で東京を舞台にし、久々に奈良での撮影となった。故郷では、河瀬監督の認知度も高くなっており「エキストラに困らなくなった」と笑う。

今後取り組みたいテーマに「不妊治療」を挙げる。自らの周囲でも不妊に悩む声があるという。「これまで家族のありようを描いてきたので、遠からず取り組めればと思っています」

河瀬監督がカンヌ国際映画祭に参加するのは今年で8回目で、日本人監督で最多となる。1997年に「萌（もえ）の朱雀」でカメラドール（新人監督賞）、10年後の2007年には「殞（もがり）の森」で最高賞パルムドールに次ぐグランプリを受賞。今年はその10年後で、パルムドールへの期待もふくらむ。

監督は「作品の力はあると思っている。今回は劇中映画も扱っているので、審査する人が映画監督だったら感じるころはあると思う」と話した。

◆「光」カンヌ公式上映 大拍手に監督「言葉にならない」

第70回カンヌ国際映画祭で23日（日本時間24日）、最高賞を競うコンペティション部門に出品されている「光」が公式上映された。上映後、会場は大きな拍手に包まれ、河瀬監督や出演者らは感極まった様子で抱き合い、喜びを分かち合った。

「言葉にならないものがこみ上げ、まだ整理できない。（観客らと）一体感を持った喜び

はかけがえのないものだと感じています」と河瀬監督。永瀬も「(エンドロール後) 格好良く立ち上がろうと思っていたんですけど、駄目でした」と笑顔で語った。

コンペ部門の審査員長はスペインのペドロ・アルモドバル監督が務め、授賞結果は28日夜(同29日未明)に発表される。(カンヌ共同)

播磨出身の女性2人が手掛けた映画 姫路で上映へ

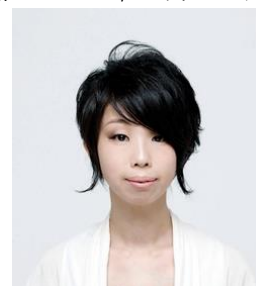
神戸新聞 2017年5月24日



北川亜矢子さん



未知瑠さん



「真白の恋」のワン

兵庫県姫路市出
子さん(37)＝東

「真白の恋」のワン身脚本家北川亜矢子(37)＝東京在住＝が知的障害者の弟をモデルに脚本を書き、たつの市出身の作編曲家未知瑠(本名・佐藤未知瑠)さん(36)＝同＝が音楽を担当した映画「真白の恋」が26、27の両日、姫路市駅前町のアースシネマズ姫路で上映される。作品の舞台・富山や、東京などで上映され、高い評価を得た話題作。2人は初の故郷での上映を「作品に込めた思いを届けたい」と楽しみにする。

北川さんは、賢明女子学院中学・高校、宝塚造形芸術大学(現宝塚大)を卒業。日本を代表する映画監督・岩井俊二さんに師事し、テレビドラマ「世にも奇妙な物語」や「ショムニ」を担当するなど多彩に活躍する。

未知瑠さんは幼いころからピアノに親しみ、龍野高中退後、大学入学資格検定を経て東京芸大へ。同大大学院修了後、宮崎駿監督の短編映画「たからさがし」や、ドラマやCMなどの音楽を幅広く手掛ける。

2人は4年前、同じテレビドラマの仕事を担当した縁で意気投合。北川さんが「真白」の音楽を未知瑠さんに依頼し、再びの「共演」となった。

「真白」は、北川さんが4歳下の弟をモデルに書き下ろした。軽い知的障害があり、富山で暮らす女性・真白が東京から来たカメラマンの男性に恋をする物語。家族らが見守る中、自分らしく成長する真白の姿を真っすぐに描いた。

作品では、スケール感のある未知瑠さんの音楽が、富山の自然や田舎町の空気をより鮮やかに伝える。

「人間のやるせなさや、いとおしさを広く共有したいと書いた作品を未知瑠さんの音楽が心に響くものにしてくれた」と北川さん。

未知瑠さんは「北川さんが障害者の家族という当事者だからこそ、ぶれのない物語ができた。思いが伝わるようにと曲を作った」と振り返り、「姫路から生まれた作品だと地元の人に知ってほしい」と話す。

26日は午後7時から、27日は午前11時半から。各回上映後、北川さんが舞台あいさつする。一般1800円、高校・大学生1500円、3歳～中学生千円。今夏には神戸でも公開予定。上映希望などはエレファントハウスTEL03・6452・8765(宮本万里子)

コープ九州事業連合が鳥栖にリサイクルセンター

佐賀新聞 2017年05月25日

■九州4県の資源物処理、障害者も雇用

九州・沖縄の8生活協同組合でつくるコープ九州事業連合（福岡県篠栗町、梶浦孝弘理事長）は、佐賀など九州4県の組合員宅から商品カタログなど資源物を回収し、一括リサイクルする事業を始めた。4月に鳥栖市に開設した処理施設で圧縮加工などして製紙会社などに販売する。庫内作業は障害者が担当し、自立支援につなげている。

大型プレス機にカタログなどを投入する「ハートコープさが」の社員＝鳥栖市姫方町の鳥栖エコセンター

処理施設は「鳥栖エコセンター」。九州各地の生協支所へ冷凍品を配送する鳥栖市姫方町の「鳥栖冷凍流通センター」敷地内に、平屋工場（床面積1550平方メートル）を建設した。

佐賀、福岡、大分、熊本の組合員数は82万人。生協が週1回の組合員宅への配達時にカタログや牛乳パック、卵パック、製品袋などを回収。各生協支所に冷凍品を配送した流通センターのトラックがそれらを積み込みエコセンターへ戻る。

エコセンターでは、大型プレス機でカタログなどの紙類を容積で5分の1程度（重さ1・2トン）に圧縮加工、製紙会社に売却して生協商品のトイレットペーパーに再生する。卵パックなどはリサイクル業者に売却する。

これまで生協ごとに取り組んでいたリサイクルを一本化したことで効率を高め、リサイクル専用の配送車を使わずに、戻り便のトラックを活用することで二酸化炭素の排出を抑制できるという。

庫内作業は障害者の就労支援を目的に、コープさが生協（本部・佐賀市）が100%出資で昨年12月に設立した「ハートコープさが」が担当。5人が新規雇用され、大型プレス機への投入作業などを行っている。

資源物の初年度売却額は1億3千万円、純利益6千万円を見込んでおり、純利益は回収重量に応じて各生協に配分する。エコセンターは「生協と連携して組合員に回収への協力を呼び掛け、さらにリサイクル率を上げていきたい」と話している。



純県産地ビール 来春に 岡山のNPO法人、精麦プラント始動

日本経済新聞 2017年5月25日

NPO法人、岡山マインドこころ（岡山県倉敷市）は24日、純岡山県産地ビール開発のカギとなる精麦プラントを備えた施設の開所式を開いた。精麦から取り組む地ビールは全国にもほとんどなく、開所式で倉敷市の伊東香織市長は、「県産大麦を使う純岡山県産地ビールに期待している」とあいさつした。

精神障害者の支援に取り組む岡山マインドこころは、2011年度から就労の場として「地ビール製造販売事業」を開始。日本財団（東京）の支援を得て、このほど倉敷市内に精麦プラントを備えた「新マインド作業所」を整備した。吉備土手下麦酒醸造所（岡山市）を運営するゼンワークス（同）と岡山大学も協力する。

国内のビールは「原料の麦芽のほとんどを輸入に頼っている」（ゼンワークスの永原敬社長）。岡山マインドこころは、米国製の精麦プラントを導入したことで、県産大麦を使えば醸造まで全工程を県内で完結する「純県産地ビール」が可能になる。早ければ来春にも発売する。

在宅療養マップ 舞鶴市作成 医療と介護を一元化／京都 毎日新聞 2017年5月24日

舞鶴市は、市内の病院、薬局、訪問介護ステーション、障害者支援センターなどを網羅した「まいづる市在宅療養マップ」（A3変形判）5000部を作成した。高齢化が進む中、高齢者が医療、介護サービスを受けながら、自宅や住み慣れた地域で暮らすために役立つ

てもらう。市によると医療と介護を一元化したマップは府北部では初めてという。

東京)生活困窮の高校生に 八王子の男性が1億円寄付 宮坂麻子

朝日新聞 2017年5月25日



白井伸介・昭島市長(左)から感謝状を受け取った田中孝さん(右)
=昭島市役所

高校の授業料は軽減されても、制服代や通学費、部活の活動費などが払えなくて困っている子たちがいる——。そんな高校生を救う給付型奨学金をつくって欲しいと、八王子市丸山町の田中孝さん(71)が、昭島市と青森県十和田市に5千万円ずつ計1億円を贈った。両市では新制度の創設に向け準備を始めている。

田中さんは、昭島市出身で、自動車や複写機などに使われるミニチュア・ワイヤ・ロープの専門メーカー「トヨフレックス」の創業者。現役時代から、工場があったフィリピン・セブ市の医療センターや高校に10年以上にわたって科学実験器具の提供や大学進学への援助をするなど、社会貢献をしてきた。

一代で年商約50億円まで築き上げた会社を2013年に売却。売却益のうち2億円を縁のあった立教大に贈り、東日本大震災の被災地や児童養護施設などの出身で福祉分野を学ぶ学生の奨学金に充てた。また15年には母校の小中学校の整備費として昭島市に1億円を寄付した。

お寺deマルシェ 町を元気に、子育てママグループが企画 奈良

産経新聞 2017年5月25日

■高取・光雲禅寺住職さんも応援

楽しく心豊かに暮らそうと、高取町で活動する子育て中のママグループ「たかまち＊高取町ママたちのちから＊」が27日午前10時～午後4時、同町越智の光雲禅寺で、ケーキやピザ、インテリア雑貨、アートなどの店が並ぶ「お寺 de マルシェ」を初開催する。代表の福西奈々子さん(37)は「笑顔あふれる空間をつくり、町を盛り上げていきたい」と話している。

メンバーは福西さんのほか、堂原咲江さん(32)、出口紫生さん(33)、松本理紗さん(35)、幸田梓さん(34)の計5人。いずれも子育て真っ最中で、福西さんが町の育児サークルなどで知り合った4人に呼びかけて昨年4月に結成した。

「情報発信」「教育」「つながり」「福祉」の4テーマで活動しており、昨年10月からは暮らしに必要な知識を学ぼうと、料理や掃除などについての講座「暮らしのレッスン」を町内で開催。今回は「高取でもおしゃれなマルシェをしたい」と企画した。

出店するのは約20店舗で、ケーキやピザのほかヘアアレンジ&カット、ヘッド&ネックマッサージ、キッズ撮影会なども。さまざまな場所のマルシェに参加している店が出店するという。「こどもフリマ」や「ヨガ教室」などの講座も行われる。

福西さんは桜井市出身で結婚して高取町に移り住み、食材ソムリエとしても活動している。ママグループでの活動の出発点は、「子育てなどに必要な講座がどうしても高取にはないの？ないのなら自分たちでつくろう」という思いだったといい、「若い人たちに『高取町に住んでよかった』『また来たい』と思ってもらえたら」と話す。

6月からは「暮らしのレッスン」第2弾の開催も予定。マルシェは入場無料で、光雲禅寺の関光徳住職は「お寺とマルシェというミスマッチのような発想がおもしろい。新しいものを取り入れることは大事で、若いお母さんたちのアグレッシブな取り組みを応援して

いきたい」としている。

沖縄の製造業の構造 公共事業費の約半分は本土ゼネコンへ 【貧困雇用 沖縄経済を讀

産業別就業者数構成(全国平均・沖縄) (%)

産業名称	沖縄県	全国	差(沖縄-全国)
農業、林業	4.07	3.51	0.56
漁業	0.44	0.26	0.18
鉱業、採石業、砂利採取業	0.04	0.04	0.01
建設業	8.88	7.37	1.51
製造業	4.90	16.22	-11.32
電気・ガス・熱供給・水道業	0.55	0.48	0.07
情報通信業	2.24	2.85	-0.61
運輸業、郵便業	4.26	5.17	-0.90
卸売業、小売業	13.89	15.28	-1.38
金融業、保険業	1.87	2.42	-0.55
不動産業、物品賃貸業	2.07	2.03	0.04
学術研究、専門・技術サービス業	2.89	3.26	-0.36
宿泊業、飲食サービス業	7.78	5.51	2.27
生活関連サービス業、娯楽業	3.83	3.52	0.32
教育、学習支援業	5.37	4.52	0.85
医療、福祉	13.91	11.92	1.99
複合サービス事業	0.91	0.82	0.09
サービス業(他に分類されないもの)	8.21	6.01	2.19
公務(他に分類されるものを除く)	5.70	3.44	2.26
分類不能の産業	8.17	5.37	2.81

(総務省統計局)平成27年国勢調査就業状態等基本集計
第6-3表 産業(大分類)、男女別15歳以上就業者数及び産業別割合

み解く(11)】 琉球新報2017年5月24日

沖縄の低賃金を改善するためには、産業ごとに労働生産性向上のための課題を分析し、その向上に取り組むことが重要です。沖縄の産業別就業者構成をみると、全国に比べ「建設業」「宿泊・飲食サービス業」「医療・福祉」「サービス業」「公務」の割合が高くなっています。やはり特筆すべきは全国に比べ製造業就業者が圧倒的に少ないということです。

戦後、沖縄の多くの農地は米軍に接収され、また、産業構造も本土復帰までは日本政府の政策が及ばなかったため、社会生活基盤整備も産業基盤整備も絶対的な遅れが生じ、弱い物的生産力しか育ちませんでした。

本土は、鉄道、道路港湾などの産業基盤が整備され、一方沖縄は、経済社会の発展のための十分な資本投下がなされませんでした。沖縄分離統治決定(1950年2月)がされ、日本政府からの援助もなく(援助開始は1963年度から)、当時の高度経済成長につながった日本の産業保護政策(1ドル=360

円)の一方、沖縄では米軍の物資調達のために1ドル=120B円が設定されました。付加価値額の大きい製造業が育成される状況にはなく、役場などの政府機関や米軍基地以外に大規模な雇用が不可能となったことで、本土とは大きく異なる基地依存型輸入経済構造となりました。

復帰後、現在に至るまでに基地依存経済から抜け出しましたが、沖縄は変わらぬ基地問題、それと一体となった沖縄振興体制(基地温存、本土還流のザル経済、ハード偏重、財政依存誘引)という構造的な問題に起因されています。最近では、政府は高率補助等と基地の「リンク論」を露骨に言及するようになりました。

日本が高度経済成長を手中に収める中、沖縄は同じ第2次産業の中でも莫大(ばくだい)な基地建設需要への対応から建設業が中心となり、復帰後は政府の振興策による公共事業が建設業の維持・増加を支えてきました。これまでの沖縄振興費1兆円のうち実に88・7%が公共事業に使われたといわれています。2009年11月の参議院予算委員会では、当時の前原誠司沖縄担当相が「沖縄の公共事業では、事業費の51%しか地元落ちていない。49%は本土に引き上げられている」と答弁し、公共事業費のおおよそ半分程度は大手ゼネコン等を通して本土に還流していることを指摘しました。

現在の第5次振興計画である21世紀ビジョンは主に観光業と情報通信産業によって組み立てられていますが、復帰当時から製造業の構成比は減る一方となっています。先日21世紀ビジョン基本計画改定により、子どもの貧困対策としてライフステージに即した切れ目のない総合的な各種施策が盛り込まれました。一方で、基盤整備という名の公共事業も大きな比重を占めます。沖縄の相対的貧困の解消のためには、県内格差の是正や経済自立にふさわしい産業や経済の発展につながるための根本的かつ具体的な議論を深めていくことが重要です。(安里長従、司法書士)

「広報ふくつ」全国一に 障害者との共生27ページ特集が評価【福岡県】



西日本新聞 2017年05月25日
受賞した「広報ふくつ」を手にする福津市職員と障害者福祉事業所のスタッフ

福津市が戸別配布している市広報紙「広報ふくつ」が、今年の自治体発行の広報コンクール（日本広報協会主催）広報紙部門（市部）で全国一となる総務大臣賞を受賞した。相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」殺傷事件を機に、市内の三つの障害者福祉事業所を1カ月にわたり密着取材し、27ページに及ぶ特集を掲載した昨年12月1日号が評価された。

取材を受けた事業所スタッフも「障害者が地域で暮らしていることを知ってもらいたい機会になった」と受賞を共に喜んだ。

「広報ふくつ」は毎月1日号で特集を組み、昨年12月1日号では「だいじょうぶ！のふくつ魂」とのタイトルで、障害者の人権と共生社会について考えた。「ふくつ」には「福津」に「不屈」の意味をかけた。

「自分たちは障害のある人たちに本当に目を向けてきたのだろうか」。広報担当の堀田典宏さん（52）＝現在は同市防災安全課長＝は、19人が刺殺されるなどした「やまゆり園」の事件に衝撃を受け、福祉担当の部署と話し合い、差別解消を呼び掛ける特集を組むことを決めたという。

泊まり込み24時間

堀田さんが取材した事業所にも、事件は影を落としていた。ある事業所の介護スタッフは「ここにいたら怖い思いに遭う？」と利用者に問い掛けられた経験を明かした。「地域にオープンにしてきたのに、防犯対策を強化せざるをえない」。苦悩のまっただ中にある事業所もあった。

堀田さんは事業所に泊まり込んで24時間密着取材をしたり、障害者と家族100人にアンケートをして差別を受けた経験などを調査したりと、障害者との共生社会をつくるという視点で立体的に取材し、読みやすい特集に仕上げた。

市民から反響の声

取材先の一つの「アトリエ夢工房」は、障害者たちが手作りするパンを提供するカフェを併設。特集ではパン生地を丸める利用者といった優しい表情の写真なども数多く掲載した。施設長の小柳雅美さんは「障害者の活動を知ってもらうことが理解につながる」と歓迎。広報紙を見た市民から「福津にこういう事業所があるとは知らなかった。今度パンを買いに行きます」と、反響の電話もあったという。

堀田さんは「取材すればするほど、自分の理解が浅かったと感じた。障害者の人権を多くの市民が考えるきっかけになればうれしい」と話している。

受賞作は福津市のホームページで閲覧可能。市広報秘書課＝0940（43）8113。

同コンクールでは県内の他の4市町も入選した。4市町と受賞作は次の通り。

北九州市＝「そうだ、北九州で働こう。」プロジェクト（広報企画部門）
▽糸島市＝ウェブサイト（市部）▽桂川町＝広報けいせん16年10月号（広報紙・町村部）
▽福智町＝福智まごころ通心（広報企画）

